

編集後記

小野 裕之 静岡県立静岡がんセンター内視鏡科

本号は表在型食道胃接合部癌, そのうちでも特に腺癌を中心に特集されている。これまで, 外科的切除例においては, 食道外科にコンサルトした場合と胃外科にコンサルトした場合で切除術式が異なる例がみられることがあった。また, 内視鏡的切除においては, 例えばSM1; 400 μ mであったとき, Barrett食道癌とした場合と胃癌とした場合で片や非治癒切除, 片や適応拡大治癒切除となってしまう, かつBarrett食道癌かどうかの診断が難しいという問題があった。

これらの問題を解決するために近年いくつかの多施設後ろ向き研究が行われ, 食道および胃癌治療ガイドラインにおいてもある程度の根拠をもって食道胃接合部癌に対応するようになってきている。今回の特集号はいくつかのエビデンスが出てきて, 取り扱いが統一されつつある今, 臨床医家, 病理医に参照していただくべき一冊として企画された。

編集後記から読む奇特な読者がどれくらいいるかわからないが, 本特集号の私なりの読み方の推薦をしたい。

まず, 序説で小山により表在型食道胃接合部癌に関する諸問題と題して, 問題点が提示されているので, ご一読いただきたい。問題点を把握したところで, 次に座談会を読んでいただくことをお勧めする。この座談会では, スクリーニング, 内視鏡診断, 病理診断, 内視鏡・外科治療について, 内視鏡の専門家として小山(司会兼任), 藤崎, 病理の専門家として大倉, 外科の専門家として瀬戸, と斯界の泰斗にお集まりいただいた。これらの専門家にやや不勉強気味な小野が質問する形で進行して

いる。不勉強が褒められるわけではないが, わからないことを基本的事項も含めて質問させていただき, 個人的には非常に勉強になった。接合部はあまり詳しくないと思っている読者の方にもきっと役立つと思う。

この座談会で何となくわかったような気になったら, 主題論文の1. 食道胃接合部癌とBarrett食道癌の鑑別は必要か, 2. 食道胃接合部腺癌のリンパ節転移頻度と特徴(多施設共同研究の結果から), 3. 同Barrett食道癌, 4. 治療戦略, 5. 外科的切除の実際と課題, のそれぞれの論文を熟読いただくとより理解が深まると思われる。

特に, 多施設共同研究の結果については, 食道胃接合部の癌に対して一定数以上の症例を集めて検討した, IshiharaらのRisk of metastasis in adenocarcinoma of the esophagus: a multicenter retrospective study in a Japanese population. J Gastroenterol, 2016 Oct 18. [Epub ahead of print]に基づいている。興味を持たれた方はこちらも参照していただくとより勉強になると思う。

食道胃接合部癌の取り扱いはここ数年で大きく変わりつつあり, *Helicobacter pylori*の陽性率が激減しつつある現在, 同部の癌が増加することが予想される。本特集号は現時点での診断・治療のストラテジーを示しており, 日常診療に当たって必読の書(言いすぎかもしれないが)と思う。数年先にはいくつか進行している前向き試験の結果が出ると思われる。新しい知見, 新しいストラテジーが出るかもしれない。それを楽しみに本特集号を読んでいただければ何よりである。